

支える誇り

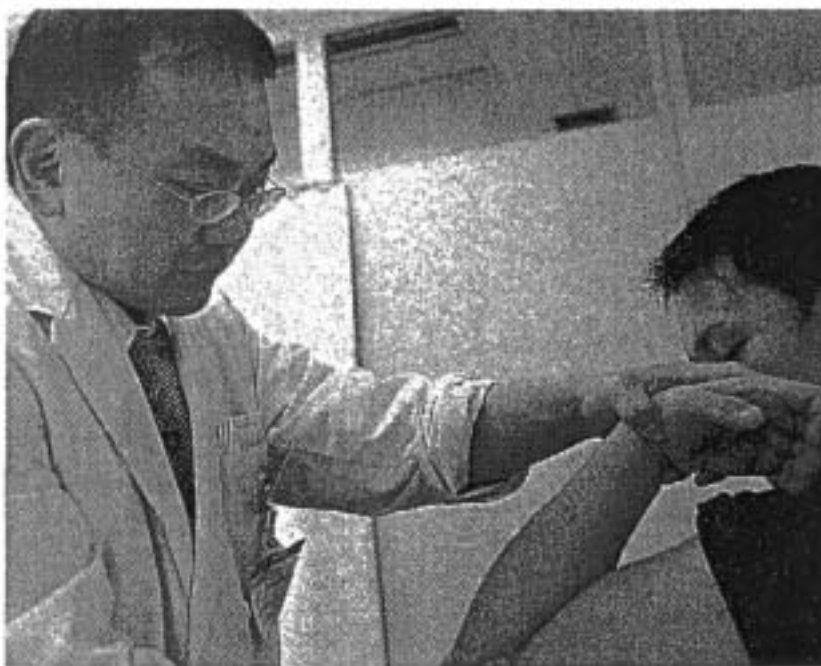
2

携帯電話が、忙しく鳴る。「ひざを痛めたので診て下さい」「この薬、飲んでもいいですか」。多い日は一日20件近くへのほろ。常に、薬を持ち歩く。「ドーピングに引っかかる薬を飲まれたら困るから」。試合会場ではポケットがふくらんでいく。

「けがの処置でも薬でも、大切なのは最初の第一歩。間違えると、治るものも治らなくなる」。さながら選手の駆け込み寺だが、その主人は、何とも楽しそうに見える。これが、若いころ夢見た生活そのものだから。

川崎市に生まれ、父の転勤で松山市へ。私立進学校に通う無類のスポーツ好き

競技経験 治療に生かす



宮崎誠司(39) 柔道・チームドクター

は、高校3年になる頃考えた。「将来、五輪へ行きたい。何の免許をとるのがいいかな」

導き出した答えが医師免許だった。愛媛大医学部へ進み、新入生ガイダンスで「スポーツ医学を勉強する

ために入りました」と自己紹介した。そして自らの発想を行動に移した。

「選手をサポートするには競技経験があった方がいい。それができるのは、今しかない」。ユニークな、逆転の発想だ。体工会柔道

部に入った。

身長158センチ。背負い投げ、すくい投げを得意技に60キロ級で活躍した。学生大会は中四国ベスト4。理系らしい発想も、柔道で生き残った。「ベクトルや回転軸の理論が、けっこう役立つんです」

91年、スポーツが盛んな

みやざき・せいじ 東海大医学部整形外科、横浜新緑総合病院整形外科医師。98年秋から全日本柔道連盟チームドクター。回連盟強化委員、医学科学委員。日本オリンピック委員会強化スタッフ。05年2月、川崎生まれ。愛媛・愛光学園高1愛媛大医学部卒。柔道4段。

もし生まれ変わったら?

やっぱり選手がいい。でも厳しいからなあ。どっちかにはなりたくない。子どもは選手にしようかな。

東海大の付属病院へ。その後もしばらくは、時間を見つけて柔道稽古を続ける生活が続けた。いわゆる釣り手と引き手で、手術や治療法を変える。技をかける足と軸足も区別する。競技者の経験がにじむ治療に、選手や指導者の信頼は厚い。

2度目の五輪を前に、私生活は一変した。昨年末、16歳下の千春さんと結婚。11日に長男が生まれた。神奈川県奈川郡野市内に間もなく新居も完成する。近い将来、いつでも自宅で選手を診られるよう設計した。「出来過ぎの人生だけど、まだ道半ば。全国に同じような医師がいてネットワークを築くのが理想」と語る。

「この仕事の魅力? 自己満足が大きいかな。ほくしか知らない部分がある。それをもとに、選手をいかに導いてあげるか。プラモデルを作る感覚に似ているなあ」

話しているそばから、また携帯電話が鳴った。(安藤嘉浩)

「この記事は朝日新聞社の許諾を得て転載しています。無断で転載、送信するなど、朝日新聞社の権利を侵害する一切の行為を禁止します。」